玉城デニー沖縄県知事当選から“署名”に到るまで

岡田富美子

はじめまして。沖縄那覇にあります、日本バプテスト連盟那覇新都心キリスト教会岡田富美子と申します。日本基督教団部落解放センターの機関紙「良き日のために」への原稿のお声かけを感謝します。何部か送っていただき読ませていただきました。みなさまの真摯な取り組みに心打たれました。また沖縄にキャラバンで来られた時、親しくお交わりいただきありがとうございました。今回の知事選は翁長前知事による埋めたて承認撤回することを決めた 11 日後の知事の急逝で始まりました。名護市長選での惨敗を受け、官邸主導の選挙選の怖さにどぎまぎしながら、約一ヶ月の時を過ごしました。「もし負けたら」と夜中に飛び起きることもありました。2013 年建白書に賛同したはずの 41 市町村長さんたちのうち 6 人しか玉城デニーさんを支持しなかったのです。

9 月 22 日のうまんちゅー（すべての人）集会（玉城デニー氏総決起集会）では雨に見まわれもらったチラシも涙とともにびちゃびちゃになりました。翁長前知事のお連れ合いの樹子さんが知事の話に触れ、最後はウチナーぐち（琉球語）で「ぬちかじり、ちばらなやーさい」（命のかぎり、がんばりましょう）と結ばれました。いよいよ 9 月 30 日、20 時過ぎに「当確」が三社によって出されましたが、N 社は最初「当確」すぐに「優勢」に変更、21 時 47 分に「当確」を出しました。教育福祉会館の一室で待っていた関係者はその瞬間、何とも言えない安堵感、笑み、涙、指笛、喜び、カチャシー、悪夢からの解放に包まれました。どんな困難が待ち受けようとこの希望の光は何にもかえがたいと思いました。デニーさんは「沖縄の美ら心がわたしを当選に押し上げた」と語りました。投票日前々日が台風に見舞われ、期日前投票の投票所閉鎖、最後の遊説は中止となりました。はらはら迎えた投票日でした。がはじける喜びとなったのです。

10 月 10 日、水曜日の夜の祈祷会で、それまで、選挙での勝利を祈っていましたから、喜びを分かち合いました。が、一人の方が、「74 年前沖縄では 10・10 空襲があり、2 万 5 千人がなくなり、町のほとんどを焼失しました。翌年が沖縄戦でしょう。沖縄戦が終わったら、基地でしょう。それが今日まで。あと 26 年で 100 年になります。沖縄はいつまで苦しめつづけられなければならないのでしょうかね」と語られました。

沖縄に住むことがゆるされ、同じ空気を吸い同じように生活しデニーさんの「辺野古に新基地はいらない」に賛同し、全面的に推していたわたしですが、わたしの口からは彼女の呻きは出てこない。ちょっと沖縄を知ってるつもりの傲慢。「沖縄を消費しないでください」とウチナーンチュ（沖縄の方）に言われかねない言動しかできない貧しい器。デニーさん当選の喜びに浸っているわけにはいかない。なぜ、ここに居ることが許されて居るのか。たまらない気持に襲われました。いま、99%のヤマトゥ（沖縄の方以外）が意思表示しない限り、日米の軍備拡張で再び沖縄が戦場にされると思うに至りました。

全国民 1%の沖縄の住民が「新しい基地はこれ以上いらない」という勇気ある意思表示をしました。「沖縄の意思表示を尊重しよう」という 99%の意思表示を集める署名を始めたいと思います。まず、日本バプテスト連盟のみなさんに呼びかけ、その後は？と思っていた時にこの執筆のお電話を頂きました。みなさま、協力をお願いします。

「見張りが、剣の臨むのを見ながら、角笛を吹かず、民が警告を受けぬままに剣が臨み、彼らのうちから一人の命でも奪われるなら、たとえその人は自分の罪のゆえに死んだとしても、血の責任をわたしは見張りの手に求める。」エゼキエル 33 章 6 節